

著者

和田 敦彦さん

わだ あつひこ

なぜ書物はそこにあるのか。その本はいつ、誰の手で、どのようにもたらされたのか。書物の場所を問い合わせ、流れを追う研究に国内外で取り組んできた。

読書環境の歴史ともいって、「リテラシー史」の領域を切り開き、前著『書物の日米関係』（新曜社、2007年）では米国における占領期の日本語蔵書の形成を追跡した。

さらに書物と読者の間のトピックに射程

を広げたのが本書である。

近代文学を専門とする早稲田大学教授。リテラシー史の研究はそれとも遠くないと語る。

「作家と小説だけでは文学は成り立たない。書物を仲介する人を抜きには語れません。場所や時代によって実は作品の価値

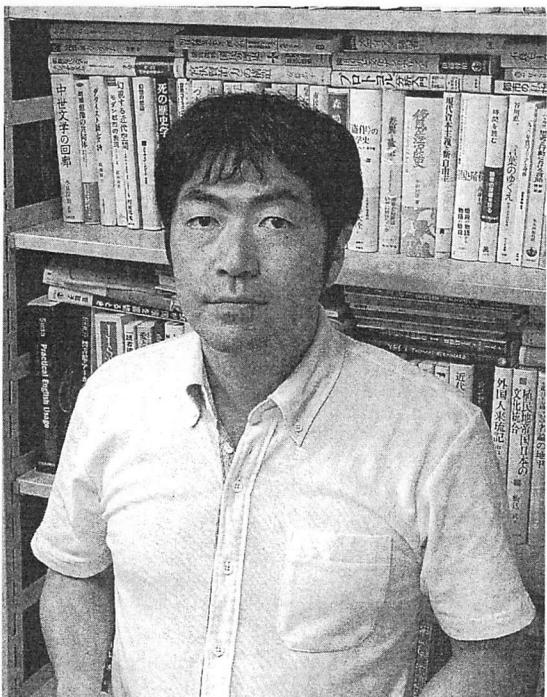
や読み方は変わるので

す」

勤めていた吉村敬子氏が近年まとめた目録によってようやく全

ての動きも今それが読めるかどうかに關わり、

## 米国「日本語図書」を巡るドラマ



第2部では、本の移動を仲立ちした人や組織に光を当てる。戦前、米国に日本語図書館を作ろうと活動した「日本学の父」で、ドナルド・キーン氏の恩師だった角田柳作（1877～1964年）。共に「国際文化」を冠しながら、34年に出発した国際文化振興会（国際交流基金に吸収）が政府に近く文化宣伝に力を注いだのに対し、52年設立の国際文化会館が政治的宣伝を警戒したことなど、興味深いエピソードが並ぶ。

勤めていた吉村敬子氏が近年まとめた目録によつてようやく全容が明らかになつた。連合国軍司令部（GHQ）の検閲に由来するプラング・コレクションと並ぶ大きな接収ルートで、「戦前」の内務省検閲図書の正本を含む貴重な素材」という。

文と写真・岸俊光